東京・小平市発

「落ち葉のリサイクル袋」で有機農業を応援

ごみ・環境ビジョン21 理事　江川美穂子

落ち葉をお宝にしよう！

都会でも野菜や花を育て、土に親しむ人がとても増えてきました。また、地産地消で新鮮、安心な地場野菜はどこでも大人気です。

一方で、おいしい野菜をつくる有機農業に欠かせない堆肥になる落ち葉が、農業に活かされず、ほとんどがごみとして焼却処理されている現状があります。

一時期に大量に出る落ち葉をやっかいものにせず、土作りに活かす取組みがあちこちの自治体で始まっていますが、東京・小平市では、落ち葉を入れる袋に着目し、袋も使い捨てしない究極の“ごみを出さない落ち葉のリサイクル”に積極的に取組んでいます。この落ち葉のリサイクルシステムは、市民参加型有機農業の推進という視点からも注目されています。その取組みをご紹介します。

落ち葉集めの袋をリユースに

東京都小平市は、面積20.46 k㎡、周囲48 kｍ。市の端を緑豊かな玉川上水、野火止用水、狭山緑道がぐるりと回り、21 kｍものグリーンロードとなっています。

このように緑の環境に恵まれている小平市ですが、秋になると落ち葉が大量に道路に溜まるので、以前は市民に集めてもらった落ち葉を全量焼却処分していました。

しかし、やはりもったいない。良質の落ち葉をほしい人に使ってもらえる方法はないかと考え、1998年度から、市民が集めた落ち葉を清掃事務所に持ってきてもらい、必要な人に渡すという落ち葉のリサイクルを始めました。

実際にやってみると、落ち葉が活用されてとてもいいのですが、落ち葉を入れるビニール袋は市民が自前で購入し、その袋は1回使用しただけで、毎年ごみにせざるをえない状況でした。

今度はこれをなんとかしたいということになり、2008年度から市が「落ち葉のリサイクル袋」を作って貸出しする「落ち葉のリサイクル事業」を本格的にスタートさせました。この袋は土嚢に使うような60ℓサイズのポリプロピレン製の袋で、上部に口を縛る紐がついています。

落ち葉の収集（2009年12月）

繰り返し使える袋を市が用意することによって、例えば家庭菜園で野菜を作っている市民には、落ち葉を集めて、腐葉土を毎年自分で作ってみよう、というきっかけにもなりました。（その場合、袋は返却せずに保管してよいそうです）

また、市内には東京多摩有機農業研究会の会員農家が10数軒あり、市民の手で集められた良好な落ち葉が堆肥の原料として求められていることも、この事業の成功のポイントです。

自治会や学校などで落ち葉が20袋以上集まった場合には、ＪＡに連絡し、農家が直接そこに取りにいく、というケースが多いそうです。小中学生をはじめ、市民が「落ち葉で市内の農業を支援すること」によって、農業や食への関心が一層深まるのではないでしょうか。毎日食べている学校給食の野菜が、みんなで集めた落ち葉の堆肥でおいしく育つ…という食育の実践にもなりますね。

落ち葉のリサイクル事業の2009年度の実績としては、袋貸出し数は1,492袋ですが、1枚の袋が繰り返し使われており、袋利用数は3,771袋でした。1枚の袋に落ち葉が6kgとして計算すると、合計22,626kgの落ち葉が有機資源として役に立ったそうです。

東京たま有機農業研究会の酒井充会長の話

市の情報紙「ごみらいふ」より

「最近、堆肥にする良質の落ち葉が手に入りにくくなっているので、この落ち葉のリサイクルシステムは農家にとって大変助かっています。玉川上水沿いや市内に点在する保存樹林のものなど、もっとこのシステムが広がって、有効利用できる量が増えると大変ありがたいと思っています」

良質な落ち葉の集め方

① 熊手で集める　⇒石や砂などが除ける
② ごみや枝などを除く
③ 集めた落ち葉を手ですくい、リサイクル袋に入れる

「落ち葉のリサイクル袋」貸出しの手順

貸出窓口：市役所4階ごみ減量対策課
　　東部・西部出張所、地域センター
貸出時間：平日の午前8時30分～午後5時
　　（地域センターのみ第1、第3火曜日を除く）
◇貸出しの前に、直接貸出窓口か電話で申込み手続きをする
◇翌年も袋を使用する場合はそのまま保管してもよい

落ち葉の持ち込み

回収拠点：清掃事務所
受付時間：火曜・木曜日　午前9時～午後4時
　　（正午～午後1時を除く）

回収できないもの
　＊イチョウの葉や松などの針葉樹
　＊砂・小石やごみが混入したもの
◇搬入困難な場合は要相談
◇20袋以上ある場合は直接農家が回収するので、ＪＡ東京むさし小平支店に連絡する